

鶴田町議会常任委員会

視察研修報告

視察先 佐賀県武雄市・福岡県福津市津屋崎

日程 平成28年8月24日(水)～26日(金)

参加者 〔教育民生常任委員会〕小関優、時苗愛子、

一戸豊、三浦勉、北谷正則、神秀次郎

○佐賀県武雄市

佐賀県武雄市は、佐賀県の西部、佐賀市の西28キロメートル、佐世保市の東約30キロメートルの場所に位置しており、面積は、195・40平方キロメートルと鶴田町の約4・2倍。人口は、4万9700人と鶴田町の約3・7倍です。

佐賀県武雄市では、官民一体となった図書館運営とICTを活用した学校教育を視察しました。

(1) 官民一体となった図書館

運営

歴史文化伝承館(旧水元小学校)など、鶴田町の文化施設の活用について学ぶため、武雄市図書館を視察しました。

武雄市図書館は、平成12年10月に建設されました。平成18年4月に樋渡啓祐氏が市長に当

選。市民の生活をより豊かにするための一つとして、武雄市図書館の365日年中無休化に取り組みました。

平成18年度には、95日あった休館日を毎年徐々に減らし、平成24年度には34日にしました。しかし、当初の目標である365日年中無休を行政で行うには限界を感じ、「行政でできなければ民間の力で」をイメージするようになりました。

ある時、テレビ番組で見た代官山蔦屋書店が「武雄市民のための図書館」とイメージが一致し、蔦屋書店と提携したいと考え、社長に直談判。平成24年5月に基本合意を締結し、平成25年4月1日より指定管理者として運営してもらえることになりました。運営費は、年間1・2億円かかっていたものが、365日年中無休、開館時間を午前9

時から午後9時とサービスを拡充しつつも、1・1億円とし、1千万円削減することができました。

また、蔦屋書店と連携することで次のサービスが拡充できました。

- ①懸架図書が10万冊から20万冊へ増加
 - ②雑誌販売の導入
 - ③映画・音楽の充実
 - ④文具販売の導入
 - ⑤電子端末を活用した検索サービス
 - ⑥スターバックスの出店
 - ⑦「代官山蔦屋書店」のノウハウを活用した品揃えやサービスの導入(自動貸出機、分類法、空間など)
 - ⑧Tカード、Tポイントの導入
- 武雄市図書館は、蔦屋書店と組むことで、市民価値の高い図

書館へリニューアルしました。来館者数は、約3倍(25万5828人(平成23年度)↓7万8242人(平成27年度))に増え、利用者割合は、市内居住者55%、市外居住者45%となり、市外からも多くのお客さんと呼ばれる施設となっております。

地方自治体では、公共施設の民間委託が進んでいます。武雄市図書館の事例は、民間企業とうまく連携することで、経費を抑えながらも、サービスの質を高めることができた事例です。鶴田町の文化施設についても、より町民価値の高い施設として活用するため、民間企業との連携を視野に入れた運営について、検討する必要があると考えます。

(2) ICTを活用した教育

統合小学校校舎建設に向け、情報化社会に対する子どもたちの学習環境を、どのように整えればよいのかを考えるため視察しました。

世界では、農業革命、産業革命に次ぐ情報革命が起きており、今後何十年かで、今ある仕事の80%が無くなると言われてます。そのため、武雄市教育委員会では、子どもたちの生き



△官民一体で運営する武雄市図書館

る力を育み、情報化社会に対応した人材を育てる必要があると考え、ICTを活用した教育に取り組んでいます。

まず、平成21年度には、普通教室全てに電子黒板を導入しました。その後、平成22年5月にiPadが発売され、樋渡市長は「これは教育に使える。これを1人1台持つ時代がやってくる。それならば子どもたちに早く持たせ、教育の現場で使うことが有効」と考え、「スピードは最大の付加価値。できない理由より、できる理由を探しなさい」と指示し、平成23年2月、試験的に小学校2校、4年生以上に1人1台iPadを導入しました。



△武雄市役所の職員から説明を受けました。

その後、iPad使用による子どもたちの学習意欲や学力の向上が確認できたため、平成26年に全小学生、平成27年に全中学生へタブレットを配布しました。費用は、小学校で約5千万円（1万8千円×2800人）、中学校で約4400万円（3万4千円×1300人）です。タブレットは、主に算数と理科の反転授業で活用しており、学校で動画をダウンロードし、家庭で動画を見て予習します。タブレット動画で予習することにより、授業時間を子どもたちによる話し合いや学び合いに多く使うことができるようになりました。また、平成32年度から学校教育として導入される予定のプログラミング教育について

も、武雄市ではすでに小学校1年生から取り組んでいます。

武雄市では、平成27年10月に教育大綱を「組むく未来を担う全ての子どもを主人公に適切なところと組むく」と定め、「子どもたちが楽しく、分かりやすく、便利に学ぶ」機会を増やすため、自治体だけではできないことを適切なところと組んで一緒にやろうとしています。

予想されていましたが、現在は、それ以上の勢いでスマートフォンやタブレットの普及が進んでいます。すでに高校生や大学生、若い世代では、1人1台スマートフォンを持つのが当たり前になっています。スマートフォンは携帯電話の延長ではなく、パソコンに電話が付いていると思つた方がよく、子どもたちの多くは、親のスマートフォンを触るなど、すでにスマートフォンと接触しています。包丁と同じように道具は正しい使い方を覚えることでその価値が発揮されます。これからの子どもたちには、早い段階でパソコンやタブレット・スマートフォンを使い方やメリット、デメリットを教える必要があります。町で統合小学校を建設するにあた

つては、ICT環境を整備し、授業やフットリバー市との姉妹都市交流に使用することで、子どもたちの学習意欲が高まると予想されます。情報化社会に対応する子どもたちを育てるためには必要と考えられます。

○福岡県福津市津屋崎（旧津屋崎町）

福岡県福津市津屋崎は、福岡県の北西部、福岡市と北九州市の中間に位置し、福岡市から車で約1時間の場所にあります。合併前の面積は、23・28平方

キロメートルと鶴田町の半分、人口は1万4千人で、現在の鶴田町とほぼ同じです。福岡県福津市津屋崎では、移住支援、起業支援、学びの場の提供などをしながら「まちおこし」を行っているNPO法人地域交流センター津屋崎ブランチを視察しました。

旧津屋崎町は、江戸時代、明治時代と塩田で栄えていましたが、大正時代に塩田が廃止され衰退が始まりました。昭和時代には、海水浴ブームにより一時盛り返しましたが、その後、国民宿舎、レジャー施設、私鉄が撤退しました。

そんな中、平成15年からまちづくりのコンサルタントとして津屋崎と関わっていた山口覚氏

が、「津屋崎の営みや哲学を新しい形で伝えていきたい」と考え、平成21年に「津屋崎ブランチ」を設立しました。

津屋崎ブランチで取り組んだ事業の中には、移住ツアーがあります。移住ツアーは、ただ誰にでも幅広く募集するのではなく、参加者の本気度を量るため、ツアー料金を1家族7万円と高めに設定。また、移住者に仕事を斡旋できるほど地元の仕事がなかつたため、WEBデザインなど、働く環境にとられない方や自分で生業を作れる方など4家族限定で募集しました。

移住ツアーには、3家族の申し込みがあり、町民と参加者が交流しながら「津屋崎では毎日どんな暮らしが待っているのか」を話し合いました。その結果、移住ツアーに参加した3家族12人が津屋崎に移住しました。その後、移住した方々が「津屋崎に住んで良かった」と感想をSNSなどに投稿し、それを見た方々が興味を持ち、その中から移住する方が現れ、現在では津屋崎ブランチを通じて移住した方が100人以上います。津屋崎ブランチでは、今後も引き続き、ワークショップなど学びの場を提供しながら、「新しい働き方、暮らし方、人とのつながり方」をつくることに

取り組むということです。

津屋崎ブランチの移住ツアーでは、結果を予想し、対象者を絞ったツアーを行いました。今後、行政において事業を企画する際は、求めている結果に到達できるよう、綿密に計画する必要があります。また、事業内容によっては、行政が取り組むより、民間団体が取り組む方が自由度が上がり、良い結果を生むものもあります。そのため、町民と対話をしながら事業を任せられる団体や人材を積極的に育てていく必要があると考えます。

総務経済常任委員会の視察研修報告は来月号に掲載します。



△津屋崎ブランチで説明を受ける参加議員（右）